あのスポット

ジャック・ロンドン　作
小泉 嘉輝　訳

かつてはスティーヴン・マッケイを信頼しきっていたが、今ではあの男を褒める気にはなれない。確かにあの頃は、スティーヴンのことが本当の兄弟よりずっと好きだった。だがもう一度、スティーヴン・マッケイに会うことがあれば、俺は何をしでかすかわからない。食べ物と毛布を分け合い、チルクート・トレイルをともに進んだ男が、まさかこんなことをするなんて、まったく想定外だった。スティーヴは誠実な男で、心優しい相棒だった。恨みや悪意などとは縁のない人間だと、俺はいつも考えていた。だがもう二度と、自分の人を見る目をあてにはしないだろう。思い返せば、あの男がチフス熱に冒されていたとき、俺が看病をしてやったな。スチュワート川の上流で、二人して飢え苦しんだこともあった。リトル・サーモンでは、スティーヴのほうが俺の命の恩人になった。それなのに、あれから何年も経った今言えるのは、スティーヴン・マッケイが俺の知る中でもっとも汚い野郎だってことだけだ。

一八九七年の秋に起こったゴールド・ラッシュが、俺たちをクロンダイクに駆り立てた。しかし出発が遅すぎて、チルクート峠を越える前に厳冬期がやってきた。しばらくは荷物を背負って歩いたが、そのうちに雪がちらつき始め、残りは橇で引こうということになり、犬が必要になった。こういったいきさつで、俺たちはあのスポットを手にすることになった。犬は高く、スポットには一一〇ドルもかかった。でも、それだけの価値はあるように見えたんだ。「見えた」ってのは、あいつが、俺が見てきたどんな素晴らしい犬たちにも見劣りしなかったからだ。体重が六〇ポンドあり、優秀な橇引きの血統をすべて受け継いでいた。だが、正確な種についてはまったくわからなかった。ハスキーでもなければマラミュートでもなし、ハドソン・ベイとも違っていた。そういった犬のどれかのようで、どれでもないようだった。また、白人の犬の血がいくらか混ざってもいた。全身を覆う毛には、黄、茶、赤、それに濁った白が混じり合っていた。体の片側には、石炭のように黒

々としたバケツ大の斑紋（スポット）があった。俺たちがその犬をスポットと呼んだのは、こういう理由からだった。

スポットの体つきには文句のつけようがなかった。調子が良ければ、全身の筋肉が束になって盛りあがった。あいつは、俺が見てきたアラスカの獣の中でとりわけたくましい体をしていたし、格別の知性があるようにも見えた。あんただって、スポットの体に目を走らせれば、あいつが同じ体格の犬の三倍は働くんじゃないかと思うはずだ。素質はあったんだろうが、働く姿を目にすることはついぞなかった。スポットの知性はそっちには働かなかったんだ。盗みと餌探しについては完璧だったし、仕事がいつ終わるかを推しはかったり、盗みを的確にやり遂げたりする、ひどく不気味な本能があいつにはあった。ある場所からしかるべき距離をとることにかけては、傑出していると言って良かった。だが働くとなったとたんに、知性が体の外へと滴り落ち、あいつはただふるふると揺れるだけの、バカなゼリーの塊になっちまった。この変わりようには、あんたも言葉を失うだろうな。

今になってよく考えるのは、あいつがバカではなかったってことだ。きっと、そういった人間が確かに存在するように、働くにはスポットの頭が良すぎたんだ。あいつが知性を働かせて、俺たちに仕事をぜんぶ押しつけたんだろうかなんて考えは浅い。何もかもお見通しだったんだろう。毎日働いて打たれるより、ときどきは打たれたとしてもまったく働かないほうがずっと楽だと、あいつは決め込んでたんだろうな。そんな計算くらい、スポットの知性にとっちゃ朝飯前だった。信じてもらえないだろうが、あいつの眼をじっとのぞき込んでいると、震えが背骨の中を上へ下へと走り、骨髄が泡になったみたいにむずむずしたことがあった。そこには、何かしら知性を含んだものが光を放っていた。その知性について、俺はうまく説明できない。言葉なんかでは到底言い表すことができないんだ。ただ見えた、そうとしか言いようがない。あの眼の中をのぞいていると、人間の魂をじっと見つめているような気になった。俺は自分が見たものに怖気づいてしまい、この犬は人間の生まれ変わりなんだとかそういった考えが、あれこれと頭に浮かび始めた。あの獣の眼の中に、何か大きな存在を感じたんだ。そこにはメッセージが含まれていたが、それを読み取るほど大胆にはなれなかった。それが何であったにしても（自分が笑い者になっているのはわかってるさ）——何であったにせよ、俺を困惑させたのは事実だった。あの眼の中に何が見

えたのかはさっぱりわからない。存在感がなかったというわけではなく、かといって色を帯びていたというわけでもない。眼そのものが動いてないときにも、ずっと奥のほうでそいつは動いていた。その動きですら、俺には見えてはいなかったのだと思う。動きを感じただけだった。それは、ひとつの表現だった——そうとしか言いようがない——それを俺は感じ取った。いや、単なる表現じゃない。もっとすごい何かだった。正体はわからなかったが、ともかく近さを感じさせるものではあった。いや、違うぞ、感傷的な意味での近さではないからな。むしろ、対等であることを示すような近さだった。スポットの眼は、鹿の眼のように情けに訴えることは決してなかった。あの眼は挑みかけていた。いいや、挑むというのでもないな。ただ、対等であることは譲らないぞと控えめに示していた。と言っても、あの眼が慎み深かったと思ったことはない。確かなのは、あいつが眼について無自覚だったってことだ。あるものはある、だから光るのは仕方ないってことか。いや、光るってもんじゃない。光りはせずに、動いたんだ。バカなことを言ってるのはわかってるさ。でも、あんたもあいつの眼をのぞき込めばわかるはずだよ。スティーヴだって同じように動揺したんだ。それで思い出したよ、一度、あのスポットを殺そうとしたんだ——なんせ何の役にも立たないんだからな。結局は失敗だった。茂みの中へ連れ出すと、あいつは不満そうにのろのろとついてきた。何が起きようとしているのか、スポットはよくわかっていたみたいだ。俺は適当な場所で立ち止まり、持っていたロープを足で押さえると、大型のピストルを取り出した。あいつはしゃがみ込んで俺を見ていた。情けに訴えたりはしなかった。ただ俺を見ていた。そのとき、わけのわからない何かが一体となり動いているのが見えた。そう、あいつの眼の中で、それは動いていた。でも、実際に見たっていうんじゃない。繰り返すようだが、俺はただそう感じたけで、見たと思ったという話だ。今ここで言いたいのは、それが俺の理解が及ばないものだったってことだ。まるで男を殺すような気分だった。「ビビるわけないだろ」とでも言いたげに、相手の銃口を静かに見つめる、理性ある勇敢な男を。また同時に、あのメッセージがすぐそこにまで現れているように思えた。読み取れるかどうか確かめようと、俺はすぐに引き金を引くことはせず、ただじっと待っていた。それはそこに、俺の目の前にあって、あいつの眼のいたる所で光っていた。もう手遅れだった。俺は怖気づいてしまっていた。全身が震え、船酔いをもよおすような神経の痙攣が、腹の中で起きていた。

俺はただ座ってあいつを見つめ、スポットは俺を見つめ続けた。ついには自分が狂乱しつつあることに気づいた。その後どうなったかを知りたいか？ 俺は銃を投げ捨て、神を畏れながら野営地（キャンプ）に引き返したんだ。スティーヴは笑っていたよ。一週間後、今度はスティーヴが同じ目的でスポットを森に連れていった。スティーヴは一人で戻ってきた。その後すぐに、スポットもふらふらと帰ってきた。

とにかく、スポットは働こうとしなかった。あいつを買うのに袋の底から一一〇ドルも引っ張り出したってのに、どうやったって働こうとしない。引き綱をぴんと張ることすらしなかった。初めて引き具を取り付けるときにスティーヴに声をかけられても、あいつは少しばかり体を震わせただけだった。一歩たりとも動かないんだぜ。巨大なゼリーの姿そのままに、ただその場で揺れていた。スティーヴが鞭で軽く打つ。スポットは鳴き声をあげるが、一歩も動かない。今度は少し強めに打つ。するとスポットは吠える――ふつうの狼のような長い遠吠えだ。ついにスティーヴは怒り狂い、半ダースの鞭打ちを食らわせる。これを見た俺は、テントから飛び出し駆けつけた。

扱いがひどくないか、とスティーヴに言うと、ちょっとした口論になった――初めての喧嘩だった。スティーヴは雪の上に鞭を投げつけ、かんかんになって離れていった。俺は鞭を拾い、続きをしようとした。あのスポットは打たれる前から、ぶるぶるとよろめきながら縮こまっていた。最初の一発を食らわせると、あいつは彷徨（さまよ）う魂のような遠吠えをした。そして地面に倒れ込んだ。ほかの犬たちを走らせると、スポットは鞭に打たれながら橇に引きずられた。仰向けでばたばたと足を動かし、振動にあわせてガクガクと揺れていた。ソーセージ製造機に入っていくかのように吠えていた。戻ってきたスティーヴは笑っていた。俺はさっきの発言を詫びることになった。

あのスポットからは、どんな仕事も引き出すことはできなかった。仕事をしない代わりにあいつが差し出してくれたのは、どんな犬にも負けない、巨大な豚のような食欲だった。やっかいなのは、あいつがきわめて利口な盗人でもあったことだ。出し抜くなんてできやしない。度重なるベーコン抜きの朝飯は、先にスポットが食事を済ませていたせいだ。あいつのおかげで、スチュワート川の上流で飢え死にしかけたこともあった。肉の隠し場へ忍び込む方法を心得ていたんだ。あいつが残

したものは、ほかの犬がぜんぶ食っていた。だがスポットは公平な犬でもあった。盗みを働く相手を選ばないんだ。落ち着きがなく、いつもせわしなくうろつき回り、どこかへ出かけていた。五マイル以内の野営地で、あいつの襲撃を免れた所はひとつとしてなかった。最悪なのは、被害者側があいつの分の勘定をしろと、毎度俺たちに請求にきたことだ。それがこの土地の掟だから当然なんだけどな。そうは言っても、これにはかなりこたえた。特にチルクート・トレイルでの最初の冬がそうだ。その冬に俺たちは、食ってもいないハムや脇肉のベーコンの支払いのせいで、一銭もなくなった。闘うことだって、あのスポットは得意だった。働く以外のことなら何でもできたんだ。少しも橇を引かないくせに、スポットはチームのボスになっていた。手下の犬たちを黙らせるさまは、まさに教育と呼んで良かった。繰り返されるいじめによって、チームには必ず、あいつの牙で生傷を負った犬がいた。いじめなんて言葉じゃ物足りないか。四つ足で歩く生き物で、スポットが怖れるものはなかった。挑発など一切されていないのに、その身ひとつで堂々と見知らぬチームに乗り込み、壊滅させていた。あいつの食欲の話はしたな？ あるときなんて、鞭を食っているところを捕まえたんだぜ。本当にあったことなんだよ。先の部分から食べ始めたみたいで、俺が捕まえたときにはもう、柄の部分に取りかかっていた。捕まえてからも、スポットは鞭を離さなかった。

けれども見た目は大したものだった。スポットを手にした週の終わりに、俺たちは七〇ドルで騎馬警官隊にあいつを売った。警官たちの中には熟練の運転手がいたから、ドーソンまでの六〇〇マイルの道のりを終える頃には、スポットは優秀な橇犬になっていると思った。思ったってのは、まだそのときは、あのスポットのことをよく知らなかったからだ。ほどなく、あいつについて何かを知ってると言えるような軽率さは、俺たちから消えることとなった。一週間が過ぎた朝、かつてないほどやかましい犬たちの喧嘩で、俺たちは目を覚ました。この騒動を鎮めたのは、戻ってきたあのスポットだった。正直な話、ずいぶんと気の滅入る朝食をとったんだぜ。でもまあ、その二時間後、公文書を携えドーソンに向かう特使にあいつを売ってしまうと、また元気が出てきた。戻ってきたあのスポットが、例のバカ騒ぎで到着を祝ったのは、それからたった三日後の出来事だった。

チルクート峠を越えてからは、ほかの一行を怖れながら、冬と春を過ごしていた。俺たちは大金を手にしていたんだ。それに、スポットからも稼ぎがあった。あいつを一度売れば、二〇回売ることになった。あいつは必ず戻ってくるし、誰も返金しろとは言ってこない。金なんていらなかった。スポットを俺たちの手から永久に引き離してくれる奴がいたなら、惜しみなく礼をしたことだろう。あいつから離れたくても、捨てることはできなかった。疑われるのは俺たちだ。けれど見た目が良いおかげで、スポットを売ることにはまったく苦労はなかった。「ケガはない」とさえ言っておけば、大金を払ってもらえた。二五ドルの安値で売ったこともあれば、一度なんかは一五〇ドルを受け取ったこともある。その連中はあいつを直接返しにきたうえに、返金を拒んだ。奴らの罵りようは、ひどいもんだった。俺たちに思いをぶつけられるのなら、払った額など安いもんだと言っていた。もっともな言い分だったから、何も言い返すことはなかった。だが今になってもまだ、罵られる前にあった自尊心を、俺は完全に取り戻したわけではない。

湖と川の氷が溶けると、ベネット湖に停めていた舟に荷物を詰め込み、ドーソンに向かった。俺たちの犬のチームは優秀だった。当然のことだが、荷物の上に犬たちを乗せた。そこにはあのスポットもいた――スポットを手放す方法などなかった。その日、あいつは喧嘩を繰り返し、次から次へと相手を外に投げ飛ばしていた。舟は狭かった。スポットは混雑を嫌ったんだ。

「ゆとりが欲しいみたいだな」翌日スティーヴが言った。「置いてけぼりにしてやろう」

事はうまく進んだ。カリブー渡船所で、スポットが岸辺に飛び移れるくらいの距離をとりながら、俺たちは舟を走らせた。大切な二匹がスポットを追っていってしまい、捜索にまる二日を費やした。再会は果たせなかった。だが、それから俺たちが得た静けさと安らぎを考えれば、一五〇ドルを拒んだあの男が言ったように、犠牲はどうでもよくなった。数か月ぶりにスティーヴと俺は笑い、口笛を吹き、歌まで歌った。満足しきっていた。陰鬱な日々が終わったんだ。悪夢が去っていったんだ。あのスポットがいなくなったんだ。

それから三週間後の朝のことだった。スティーヴと俺は、ドーソンの川岸に立っていた。ベネット湖からやってきた小舟

が、岸に到しようとしていた。すると突然スティーヴが飛び上がり、不吉なことを口にした。俺はスティーヴの視線の先を追った。視線の先、舟の舳先には、ぴんと耳を立てたスポットが座っていた。スティーヴと俺は、そそくさとその場を去った。あのときの逃げ足の速さは、打ち負かされた野良犬か、臆病者か、あるいは判事から逃げる男を思わせただろう。目撃した警部補の頭には、最後の例えが浮かんだらしい。法務官の舟が俺たちを追っていると推測したわけさ。警部補は、真偽を確かめることなく尾行を始め、M&M酒場で俺たちを追いつめた。二人で釈明に声を荒げたのは、舟に戻ってスポットに会うのはごめん被りたかったからだ。これが功を奏して、警部補が舟を見に行くことになった。この間俺たちは、別の警官の監視下に置かれた。警官の手が離れると、俺たちは小屋に向かった。到着した小屋のポーチでは、あのスポットが俺たちを待っていた。ここに住んでいると、どうしてわかったんだ？ 四万人がドーソンにひしめき合っていたあの夏、小屋なんてほかにいくらでもあったはずだぞ？ いやそれ以前に、俺たちがドーソンにいるってどうしてわかったんだ？ 答えは、あんたの想像にお任せするよ。だがこれまでの話を忘れないでくれ。あいつの知性と、眼の中で光る不滅の存在のことを。

スポットを手放すことはできなかった。ドーソンには、チルクートであいつを買った奴がたくさんいて、すでに悪い噂が広まっていた。六回ほどは、ユーコン川を下る船端蒸気船にスポットを乗せていた。だがあいつは最初の港で船を降り、早足で川岸をさかのぼり帰ってくるだけだった。売ることも、殺すことも（二人とも挑戦済みだ）できなかったし、ほかの誰にも殺せなかった。スポットには摩訶不思議な生命力があった。メインストリートで起こった五〇匹の犬の大喧嘩に、あいつが飛び込むのを見た。犬たちが散りぢりになった後に現れたのは、四本足で立つ無傷のスポットだった。傍らには二匹の犬が死にかけていた。

ディンウィディー少佐の貯蔵庫から、スポットがムースの肉をひとかたまり盗むのを見たことがある。ミセス・ディンウィディーが料理係に雇うインディアン女が、斧を手に追いかけた。肉があまりに大きいせいで、スポットはあと一歩で追いつかれそうになっていた。インディアン女があきらめると、あいつは丘をかけのぼっていった。そこにディンウィディー少佐が直々においでになり、あたりにライフルを撃ちまくった。少佐は弾倉を二度空にしたが、弾はあのスポットをかすりも

しなかった。警官が駆けつけ、街の境界内で発砲したかどで少佐を逮捕した。ディンウィディー少佐は罰金を払い、スティーヴと俺は少佐に、スポットが盗んだムースの肉の代償として、骨身にかかわらず一ポンドにつき一ドルを支払うことになった。彼がその肉を手に入れたのと同じ額だ。その年、肉は高かった。

俺は、自分の目で見たことしか口にしない人間だ。こんなこともあった。あのスポットが氷にあいた穴に落っこちた。氷の厚さは三・五フィートあり、下に流れる川の水が、スポットをわらでも吸い込むみたいにさらっていった。そこから三〇〇ヤード下った所には、病院用の大きな穴があった。スポットはその穴からはいあがり、水を舐めとった後、つま先で固まっている氷を咬みくだいた。それから小走りで岸をあがると、金鉱地管理官（ゴールド・コミッショナー）のでっかいニューファウンドランド犬を打ち負かした。

一八九八年の秋、スティーヴと俺はスチュワート川を目指して、もうすぐ凍り始めようとしている川面を漕ぎ進んでいた。スポット以外の犬も一緒だった。スポットにはもう、十分すぎるほど食料をやったんだ。チルクートであいつを売って手にした金では釣りがこないほど、時間やトラブル、金や食い物を俺たちは払わされた。特に食い物がひどかった。だからスティーヴと俺は、スポットを小屋の入り口につないだままにして、荷物を引いて出ていった。その夜、俺たちはインディアン川の河口で野営（キャンプ）をした。あいつを振り切ったことを考えると、愉快になった。スティーヴは面白い奴で、そのときも毛布にくるまり座る俺を笑わせていた。嵐が野営地を襲った。あのスポットが犬たちの輪に入り込み、彼らを打ち懲らしめていたんだ。思わず身の毛がよだったよ。いったいどうやってあそこから抜け出したんだ？ 答えはあんたの解釈次第さ。俺にはさっぱりわからないからな。クロンダイク川をどうやって渡ったのか？ これもまた謎だ。なにより、どうしてスポットは、俺たちがユーコン川の上流に向かったってわかったんだ？ そうさ、俺たちは水路をとったんだ。鼻はきかなかったはずだ。スティーヴと俺は、スポットに迷信を持ち始めた。俺たちの神経はあいつに逆なでされていた。というより、ここだけの話、俺たちはスポットに少しおびえていただけだった。

厳冬期がやってきたのは、ヘンダーソン・クリークの河口にいたときだった。そこで俺たちは、スポットを小麦粉二袋と

交換した。その袋をすでに結びつけてあった荷物に加えて、銅を探してホワイト川をまた上流へと進んだ。ところが、その荷物がそっくりなくなっちまった。引き綱や獣皮、人間の髪から犬橇まで、何もかもが見つからずじまいだった。きれいさっぱり消えたんだ。この地の新しいミステリーが誕生したってわけさ。スティーヴと俺は、必死になってスチュワート川の上流を目指した。そうして六週間が経った頃、あのスポットが野営地にのそのそと現れた。スポットはまるで動く骸骨のようになっていて、脚をひきずって歩くのがやっとだった。それでも辿り着きはした。どこのどいつが俺たちの行き先を告げ口したのか、教えてもらいたいもんだ。目的地なんて、ほかにも数え切れないほどあったんだぜ。なのにいったいどうやって？　教えてくれ。俺には説明できないんだよ。

スポットは死ななかった。メイヨー村にいたとき、スポットはインディアンの犬と喧嘩をやりだした。飼い主の男は斧を振るった。だが斧はスポットをとらえられず、男は自分の犬を殺してしまった。銃弾をそらす魔法なんて聞いたことがないよな――俺だって、大男の斧の先をずらしてしまうなんて、おかしなことだし、信じられない光景だって思うよ。でもこの目で見ちまったんだ。あの男が自分の犬を殺したかったはずがないだろう。説明してくれよ。

スポットが肉の隠し場に忍び込んだ話はしたな。あれは俺たちにとって、死も同然の出来事だった。もう仕留める肉なんて見つかりはしないのに、肉こそが命をつなぐすべてだったからだ。ムースの群れはもう数百マイルも離れた所にいて、インディアンたちがその群れを追っていた。そんな状況だった。まだ春先のことだったから、凍った川が溶け出すのを待つしかなかった。犬を食べるしかないと腹をくくったときにはもう、俺たちはがりがりに痩せてしまっていた。スポットから食おうとした。そのときのあいつがとった行動がわかるか。隠れやがったんだ。どうやって自分が食われるのを理解したんだろうな？　俺たちは夜を徹してスポットを待ち伏せたが、結局あいつは帰ってこなかった。だからほかの犬に手をつけるしかなかった。二人でチームの犬をぜんぶ食ったよ。

この話には続きがある。でっかい川に張った氷が溶け始めたときに、数十億トンの氷が押し合いへし合い、粉々に砕けながら流れる様子は、あんたにも想像できるだろう。スチュワート川がごうごうと呻くような音を立て流れ出したあのとき、

俺たちが見たのは、厚い氷の真ん中に立つスポットの姿だった。川を渡って上流のほうに行こうと思っていたらしい。スティーヴと俺は有頂天になり、叫びながら川岸を駆け回り、帽子を宙に投げた。ときおり、俺たちは立ち止まって抱き合った。そんなに騒いだのも、スポットの最後を目撃したからだ。百万にひとつだって、あいつが助かる道はなかった。ありはしなかった。氷が溶け出すと、俺たちは乗り込んだカヌーを漕いでユーコン川まで下り、そこからまたドーソンへと下った所で船を停めた。ヘンダーソン・クリークの河口にある小屋で、ごちそうでも食って一週間ほど過ごそうと思ったんだ。ところがドーソンの岸に着くと、そこにあのスポットが座っていた。ぴんと耳を立て、しっぽを振り、微笑みながら、温かく歓迎するような様子で俺たちを待っていた。どうやってあの氷の上から抜け出したんだ？ 俺たちがドーソンに来ることをどうして知ってたんだ？ あの時あの岸に着く予定だったのをいったいどうやって？

あのスポットのことを考えれば考えるほど、この世界には科学を超える何かが存在するんだと信じてしまう。どんな科学的根拠に基づいたって、あのスポットのことは説明できやしない。スポットは、超自然的現象か神秘主義に、神知論的なものが多分に入り込んだような、そんな類のものなんだろう。クロンダイクは良い所だ。スポットがいなかったら、今ごろ俺はあっちで大金持ちになってたかもしれないな。スポットは神経にさわる奴だった。まる二年間あいつに耐え続けたが、ついにスタミナが切れたらしい。一八九九年の夏、俺はクロンダイクを出た。スティーヴには何も言わず、こっそりと抜け出した。けれどちゃんと手はずは整えていた。スティーヴにはメモと一緒に、「ラフ・オン・ラッツ」[二]の容器を入れて、使い方まで書き残しておいた。あのスポットのせいで、俺の肉体はすり減り、骨と皮だけにまでなっていた。同時に神経が過敏になっていて、近くに誰もいないのに、跳びあがってきょろきょろした。だが、スポットから離れたあとの自分の回復ぶりには驚いた。サンフランシスコに着くまでに、体重を二〇ポンド取り戻し、フェリーがオークランドに着く頃にはもう、体型は元に戻っていた。妻ですら、家を出る前とのちがいを見つけられなかった。

一度だけスティーヴから手紙があった。その文章から、彼のいら立つ様子が見てとれた。スティーヴにスポットを任せたことは、少々酷だったみたいだ。それに「ラフ・オン・ラッツ」をそこかしこで使ってみたらしいが、何の効果もなかった

そうだ。それから一年が過ぎた。俺は職場に復帰していて、万事順調だった――少し太ってしまったくらいだ。ようやくスティーヴが帰ってきた。彼からは何も知らされていなかった。蒸気船の乗客リストの中にスティーヴの名前を見つけ、俺は戻ってきた理由を考えていた。だが、すぐにその必要はなくなった。ある朝目を覚ますと、わが家の扉の柱に鎖でつながれたスポットが、牛乳配達の男の仕事を邪魔していた。スティーヴがちょうどその朝、シアトルに向かっていることを後になって知った。もう体重は増えなかった。スポットのためだからと妻に、ネームタグ付きの首輪を買わされた。それから一時間もしないうちに、スポットは妻のペルシャ猫を殺して感謝の気持ちを示してくれた。あのスポットからは逃げられやしないんだ。スポットは絶対に死なないから、俺は死ぬまでこいつと一緒らしい。こいつが来てからはあまり食欲がない。やつれたと妻に言われる。昨夜は、あのスポットがハーベイさん（隣の家のご主人だ）の鶏小屋に忍び込み、高級種の鶏を一九羽も殺しやがった。弁償しなきゃならない。別の隣人は、妻と口論をしたあげく引っ越していった。スポットが喧嘩の原因だった。そういうわけで、スティーヴン・マッケイには失望している。これほど卑劣な男だとは思いもしなかった。

一 テキストとして使用したのは、アール・レイバー（Earle Labor）らが編集した *The Complete Short Stories of Jack London* (1993, Stanford UP) に収められた "That Spot" (pp.1324-32) である。

二 ネズミやゴキブリなど、家庭内の害獣・害虫を駆除する製品の名称。

訳者あとがき

ジャック・ロンドン（一八七六～一九一六年）は、『野性の呼び声』（一九〇三年）や『白い牙』（一九〇六年）など、犬が活躍する長篇小説の作者として知られている。この作家、実は短篇小説でも、犬に活躍の場を与えている。すぐに思い浮かぶのは「火を熾す」（一九〇八年）の中で、極北をひとり歩き続ける語り手に、終始つきまとう犬だろうか。しかし、この物語で描かれているのは、「人間」である語り手であり、「犬」はあくまで付帯的な存在である（ロンドンは、「火を熾す」の前身とも言うべき同タイトルの小品を、一九〇二年に発表しているが、この作品に犬は登場しない）。実際のところ、ロンドンが正面きって「犬」をとりあげた短篇については、ほとんど知られていないのではないだろうか。

その理由として、そういった短篇が、前述の二大長篇の陰に隠れてしまっていると考えることは、もちろん可能である。だが事実はもっと単純で、数が圧倒的に少ないのだ。ロンドンは約二〇〇もの短篇を残しているが、そのうち――ロンドン研究の第一人者アール・レイバーの言葉を借りれば――「真の『犬物語』」（強調原文）は、わずか三作品に過ぎないのである。「あのスポット」は、このうちの一作にあたる。

「あのスポット」を一読すればおわかりになるように、ロンドンはスポットを、長篇の犬とはずいぶんと異なる生き物として描いている。スポットは、そり犬としての仕事をまったくしない。働くくらいなら殴られたほうがましだと考える。そんな犬は不必要だとして、飼い主には売られ、捨てられ、逃げられる。しかし必ず戻ってくる。不気味でわけがわからない。まるで犬の姿をした幽霊であるかのようだ。結末部で「幽霊犬」とまで呼ばれる『野性の呼び声』のバックにしても、野生に生まれた『白い牙』のホワイト・ファングにしても、ロンドンが描くのは、犬である彼らの「強さ」ゆえの「怖さ」である。一方でスポットの「怖さ」は、文字通りの「怖さ」である。「あのスポット」には、二〇世紀初頭のリアリズム小説というよりもはるかに、エドガー・アラン・ポー（一八〇九～一八四九年）的なゴシック小説に似た味がある。

ロンドンがこの風合いの小説を書いたことを、不思議がる必要はない。彼はポーを敬愛していたのだから。一九〇三年、ロンドンは「フィクションにおける恐怖と悲劇」と題したエッセイを発表し、そこでポーを絶賛する。そして、ポーの作品を皮切りに、名作には必ず「恐怖」の要素があることを指摘し、その美的価値の重要性を説いている。というわけで、ロンドンの「あのスポット」では、随所にポーの影響が感じられる。動物を不気味に思う点は、「黒猫」と共通している。スポットの眼に対する恐怖は、「告げ口心臓」で語り手が老人の眼をおそれていたことを彷彿とさせる。どこまでも語り手を追うスポットは、「ウィリアム・ウィルソン」の語り手につきまとうウィルソンを思わせる。

その一方でロンドンは、ポーの二番煎じに留まっているわけではない。「あのスポット」には、彼独自のゴシック性を見出すことができる。たしかに「黒猫」において、黒猫は不気味な存在として描かれてはいるが、これはあくまで語り手の主観であり、実際の黒猫は人懐っこくかわいい。真の「怖さ」は、語り手の天の邪鬼な心理、いわば人間のほうにある。しかし「あのスポット」においては、人間はとても人間らしい。語り手はスティーヴンにスポットを任せきりにして逃げ、怒ったスティーヴンにスポットを返されると、自分の行為は棚上げにして、ひとり恨みを募らせる。この語り手については「自己中心的」という、いかにも人間らしい言葉で片付けることができる。やはり、怖ろしいのは犬のほうである。スポットは「どんな科学的根拠に基づい」ても「説明できやしない」、「超自然的現象か神秘主義に、神知論的なものが多分に入り込んだような」理解不能な存在なのだ。この犬は、デカルト的な機械的動物ではないし、ダーウィン的に説明するには知性が働き過ぎている。ましてや、当時盛んになりつつあった「動物愛護」の思想によって守られるべき対象だとは、とてもじゃないが思えない。

また、この不可解な存在が活躍する舞台にも注目すべきである。不気味な生物に、極北の極寒の中、白い大地の上を、延々とつきまとわれる。この種の「怖さ」は、実際にクロンダイクで過ごした経験のあるロンドンにしか描けなかったものだろう。

拙訳「あのスポット」は、九五年ぶりの新訳となる。本作が最初に紹介されたのは、一九二一年、大正一〇年のことである。訳者は吉場紅骨という人物で、タイトルは「斑犬」。訳者について詳しいことはわからなかったが、訳者の創作が多分に認められていた当時を考えれば、とても忠実な翻訳をされる人だったようだ。チルクート「峠」を「水路」としたり、「ラフ・オン・ラッツ」についてはまったく触れなかったり、そのほか所々で訂正すべき所はあれど、当時の翻訳をとりまく環境を考えれば、その正確かつ丁寧な訳業には敬意を抱かざるを得ない。氏の翻訳には大いに勉強させていただいた。またこの作品は近々、日本ジャック・ロンドン協会会長である鹿児島国際大学の森孝晴先生の訳によっても、世に出ることになっている。森先生と同じ時期に同じ作品の翻訳に取り組んでいたことには嬉しさ半分、恐縮半分という思いだが、この作品がやはり再評価に値することを裏付けるエピソードとして、ここに記しておきたい。

先に挙げた「真の『犬物語』のうち、残りの二作についても、翻訳の状況についてのみ簡単に述べておこう。「バタール」（一九〇二年）と「ブラウン・ウルフ」（一九〇六年）だが、前者は『ジャック・ロンドン研究』第三号（二〇一六年）にて拙訳で、後者は『すばる』第三七巻第四号（二〇一五年）にて柴田元幸訳で読むことができる。ジャック・ロンドンの短篇「犬物語」が、『野性の呼び声』や『白い牙』のように、読者を魅了することを願ってやまない。

最後に、まだまだ荒削りな原稿を読み、貴重なご指摘をくださった辻井栄滋先生、水野尚之先生、文芸表象論分野の院生たちに、そして図らずも「あのスポット」の新訳を先に出すことになってしまった生意気な大学院生を、快く応援してくださった森先生に、心からの感謝を申し上げたい。とはいえ、拙訳は文字通り拙訳である。何を言っても聞かない犬としばらくの時間を過ごしたが、読者のご指摘には素直に耳を傾けたいと思っている。